



TITLE:

マルクスの「(再建される)個人的所有」概念について(1) - 基本的枠組 -

AUTHOR(S):

小川, 恵也

CITATION:

小川, 恵也. マルクスの「(再建される)個人的所有」概念について(1) - 基本的枠組 -. 経済論叢 1980, 126(3-4): 150-169

ISSUE DATE:

1980-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/133841>

RIGHT:

經濟論叢

第126卷 第3・4号

| | | |
|---------------------------------------|---------|----|
| 経済学のプランと方法（上）…………… | 平 田 清 明 | 1 |
| クラウディング・アウト効果をめぐって…………… | 石 川 常 雄 | 21 |
| マルクスの「（再建される）個人的所有」 概念について（1）…………… | 小 川 恵 也 | 44 |
| ヒルファディングの組織資本主義論と 財政民主主義…………… | 小 淵 港 | 64 |
| マルクスの絶対的剰余価値論…………… | 岸 徹 | 79 |

経済学会記事

昭和55年9・10月

京都大學經濟學會

マルクスの「(再建される) 個人的所有」

概念について (1) —— 基本的枠組 ——

小 川 恵 也

1 は じ め に

わが国では、1960年代の後半から、マルクスの「個人的所有」の「再建」として社会主義あるいは共産主義を把握する見方が¹⁾、平田清明氏の問題提起とともに、論争対象として大きく取りあげられるに至った。以後、経済学原論、学説史の分野のみならず、哲学、歴史学、社会主義経済学などの分野から多くの発言がなされた²⁾。論争はいまだに終結をみていない。理由はおそらく、全理論分野にわたっての論争整理の欠落とマルクスの理論の全体像の提示の欠如であろうと思われる。以下、小論でそれがなされているという自負はないが、本論は、その克服の一つの試論である。

最近、山之内靖氏の「個体的所有範疇の再審」が連載されていて興味深い。氏の「再審」の所以は、一つは、マルクスの「否定の否定」の論理をヘーゲル

1) Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, 1890, Dietz Verlag, 1962 S. 791, 長谷部文雄訳「資本論」第 巻, 1964, 597ページ。しかし、長谷部訳は、「個人的所有を生みだす」となっているが、「再建する」と訂正すべきである。

2) 論争参加者ないしその論文には枚挙の暇がない。ここでは、本論文に必要なしうる限りで挙げておく。平田清明, 「市民社会と社会主義」, 1969, 同, 「経済学と歴史認識」1971, 福富正実, 「共同体論争と所有の原理」1970, 同, マルクスの「個人的所有」論について, 京大「経済論叢」109-3, 1972, 林直道「史的唯物論と経済学」(上)(下)1971, 同「史的唯物論と所有理論」1974, 長砂実, 社会主義に関する古典の命題の現代的意義, 「唯物論」創刊号, 1973, 12月, 芦田文夫, 「社会主義的所有と価値論」1976, 直接論及したものではないが、重要なものとして, 芝原拓自「所有と生産様式の歴史理論」1972, 熊野聡「共同体と国家の歴史理論」1976, 中村哲「奴隷制・農奴制の理論」1977, 望月清司「マルクス歴史理論の研究」1973, また、最近では、西野勉, 資本の直接的生産過程と「個人(個体)的所有」「再建」問題, 「海南経済学」第5号, 1977, 3月, 西村可明, いわゆる「個人的所有」についての一考察, 橋大「経済研究」29-4, 1978, 10月などがある。

の悪しき残存としてみることも³⁾、もう一つは、平田氏の所論をその傾向の増幅されたものとして把握すること⁴⁾、最後に、現代の変革における苦悩を現実に即し正確に把握しなおすことである。ウェーバーの官僚制論が、それに際して、理論的基礎としてある⁵⁾。

しかし、マルクスの商品論、ルカーチの物象化論、ウェーバーの官僚制論という系譜で、マルクスの「否定の否定」の論証を切って捨てる、ないしニュートピア的だと論難することは可能であろうか。問題は非常に微妙とならざるを得ないし、また、今、氏の立論に全面的に答える余裕もないが、確かなことは、そういう問題の設定自体が、現代を、もっといえば、第二次大戦以後の資本主義社会を、判断基準とした場合に出てくるのであって、そこにはマルクスの内在化から一定のズレが生じている。このことは、平田氏自身が「個体的所有」再建把握においてそうした観点に立脚していることに基づくのかも知れない。

問題は、やはり、マルクスの内在化が正確になされることである。そのためには、今やマルクスを生み出し、マルクスの諸々の理論、とりわけ「資本論」を生み出したものは一体何であったかが正当に問われなければならない。マルクスの直面した時代、歴史的背景が、マルクスの主体的努力と同時に問われなければならない。その両者の絶えざる交渉、交錯、緊張関係が問われなければならない。そのことは、マルクスの使用する用語、範疇、概念の正確な把握へと導いてくれると確信する。しかし、ここではマルクスの直面した時代を紙面で再現する必要はない。又、それはここでの直接的課題ではない。マルクスがその全著作の中で明らかにした競争的資本主義、産業資本主義の成立期の西ヨーロッパ社会を念頭におき、以下の展開の各節で思いおこせばよいのである。このことを前提にして、以下、マルクスの「所有」概念を、労働、生産力、生産関係の

3) 山之内靖、個体的所有範疇の再審1、「経済評論」1978、11月、13ページ。同様にマルクスの「否定の否定」は sollen (べき) の先行してその科学性に疑問を投げかけるものに刀田和夫、いわゆる「個人的所有」について、「唯物史観」第13巻、1974、がある。

4) 山之内靖、個体的所有範疇の再審5、「経済評論」1979、3月、86-89ページ。

5) 同上6、「経済評論」1979、6月以降の展開を参照されたい。

三つの視角から考察し、さらに、それらの総合として「個人的所有」ならびに、その「再建」の概念規定をする。この立論の範囲では、所有の私的性格、および社会的=共同的性格、つまり形態を示す限りでのそうした性格は捨象されている。「所有」といえば、資本主義下にすむ我々は、通常、無意識に「私的所有」を前提としてしまうのであるが、それは根底から改められなければならない⁶⁾

II 労働 = 所有

マルクスの所有論を語る場合、労働=所有は最も基礎的・基底的規定であって、これを欠落させては彼の所有論は土台を失う。マルクスは「資本論」で次のように述べている。

「労働はさしあたり、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち、それにおいて人間が、自然との質料交換を自分自身の行為によって媒介し・規制し・統制する一過程である。人間は、自然質料を自分自身の生活のために使用されうる形態で取得するために、じぶんの身体に属する自然力たる腕や脚や頭や手を運動させる。彼は、この運動により、自分の外部の自然に働きかけてこれを変化させることによって、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は、自分自身の自然のうちに眠っている諸力能を発展させ、その諸力の働きを自分自身の統制のもとにおく。」⁷⁾ (傍点筆者)

林直道氏は、所有は一から十まで生産関係規定であるとされているが⁸⁾、ここにみられるように必ずしもそうではない。林氏の所有の一般的定義をこれに適用してみると次のようになる。「社会が、自然を自分のものとする。」ないし「人間が、自然を自分のものとする。」氏のいう所有の一般規定、「だれかが(主体)なにかを(客体)自分のものとする」⁹⁾はこのように完全に適用可能

6) いわゆるエンゲルス解釈は、この所有=私的所有、というドグマに一定犯されたものといえよう。これについては、次稿で詳細に論ずる予定。

7) *a. a. O.*, S. 192. 訳書151ページ。

8) 林直道「史的唯物論と所有理論」114ページ。

9) 同上, 108ページ。

なのである。氏のいう、労働過程ないし生産過程も生産関係であるとする場合の規定は、実はこの抽象度の下では捨象されていると考えられる。ここでは、主体が、主体相互間の関係が、いかなるものかは規定されていないし、また、いかにして、いかなる媒介を経て「自然が自分のものとなる」かも規定されていないのである。

それでは、この規定は全く無意味であるのかといえ、そうではない。この規定こそ、マルクスが命をかけて主張し、死守したものといえる。何故なら、ここにおいてこそ、人間の本質、たんなる動物とは異なる人間の類的本質が把握されるからである。つまり、人間の積極性、活動性、能動性、実践性が捉えられ、さらにその活動の意識性と計画性もつかまれているからである。マルクスは、蜘蛛や蜜蜂の作業との対比でその点を確認している。さらにいえば、マルクスがフォイエルバッハを徹底的に批判したのも¹⁰⁾、また、ヘーゲルの弁証法を逆立ちした形態から足で立った正常な形へと逆転させえたのも¹¹⁾、実にこの「労働する主体」としての人間把握が基礎・土台となっているのである¹²⁾。

しかし、この規定の抽象性は、限界性ももっている。つまり、その超歴史的規定だという点で。マルクスは「資本論」でいう。

「労働過程——われわれがその簡単に抽象的な諸契機において叙述してきたような労働過程は、使用価値を生産するための合目的な活動であり、人間の欲望のための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの質料変換の一般的条件であり、人間生活の永遠的な自然条件であり、したがってまた、人間生活のどの形態からも独立したものであり、むしろ、人間生活のすべての社

10) Karl Marx "Thesen über Feuerbach", 1845, Karl Marx-Friedrich Engels Werke (以下 MEW, と略す) Bd. 3, 1958, SS. 5-7, 真下信一訳、マルクス、フォイエルバッハにかんするテーゼ、「マルクス・エンゲルス全集」(以下「マルエン全集」と略す)第3巻, 1963, 3-5 ページ。

11) a. a. O., S. 27, 邦訳, 20 ページ。

12) この見地から平田氏が所有の根底に「労働」ないし「生産」を置くことに賛同しうる。労働はまさに「自然のわがもの化」であると同時に「人間の本質のわがもの化」=「自己獲得」なのである。その他、富沢賢治「唯物史観と労働運動」1974, 5-28 ページ、田中菊次『「資本論」の論理」増補版, 1978, 55-59 ページ参照。

会形態に等しく共通したものである。」¹³⁾

この規定は、先のような所有の最も基礎的な規定だという積極面と同時に、歴史的規定としては、そのままでは何ものをも説明しないという側面をもつ。しかし、この規定はその積極面ゆえに、歴史的規定が展開されるたびにたえずふりかえられる。それは、すでに歴史的なものとしての労働過程なのであるから、所有＝労働＝「自然のわがもの化」という最も基礎的な規定とは区別して扱われなければならない¹⁴⁾。

III 生産力としての所有

先の規定では捨象されていた「自然をわがものとする」¹⁵⁾度合がここで問題になる。同時に「人間の自然」の¹⁶⁾発展度が焦点となる。

ところで、従来の論争ではこの視角からの問題の取りあげ方が不十分であったため、「経済学批判要綱」(以後「要綱」)の「資本制生産に先行する諸形態」(以下「諸形態」)稿におけるゲルマン的所有形態＝個人的所有という規定を、そのまま「資本論」での「個人的所有」と同一のものと決めてかかる立論が多かったように思う。たとえば、平田氏は、ゲルマン共同体の「個と類の矛盾の解決形態」としての「連合」様式に特別の注意を払われ、氏のいう、社会主義のもとでのアソシアシオンの所有＝協同連合体所有の原型とされている¹⁷⁾。また、福富正実氏は、ゲルマン共同体の家族の家父長制の大家族構成に注意を払われ、マルクスのいう「個人」は実は「集団」であって、資本主義における株式会社企業ないし社会主義下で構想される「協同組合工場」によく合致するという点から、高度共産主義への過渡期としての社会主義において成立する「社会的

13) *a. a. O.*, SS. 198-199, 邦訳20ページ。

14) 林氏が田口富久治、マルクスにおける歴史認識と所有論、「科学と思想」第2号、1971、10月を批判されたのは、実は、この観点からであった。「労働過程論的範疇」という規定は不必要な混乱を招くので、田口氏は自己批判されるわけであるが、たしかにこの次元では生産関係表現として意味をもつ。いわゆる「労働における疎外」の諸現象。

15) 平田「市民社会と社会主義」136-147ページ。マルクスにおける経済学と歴史認識(下の1)、「思想」1966、8月、111ページ。

所有の一種」たる「協同組合所有」の原型として、ゲルマンの個人的所有について語られる¹⁶⁾。氏の立論の根拠は、「反デューリング論」以降の共同体に関する認識の深まり（モルガン「古代社会」；ロシアのコヴァレスキーとの交友による。文献的には、ザスーリッチあて手紙、古代社会ノート）と、パリ・コミューン以後の共産主義の段階把握志向の高揚とにある。ザスーリッチあての手紙以後、「資本論」の「小経営」というのは新たな意味をもってきたと¹⁷⁾。しかし、これらの立論には、容易に首肯しがたい。この点を以下、「要綱」ならびに「諸形態」で検討する。

「諸形態」の立論の展開基軸は何であったのか。この問が正当に発せられなければなるまい。かかる設問は、すでに芝原拓自氏や原秀三郎氏によっておこなわれ、一定の解決もみている。「諸形態」では、近代の労働主体とそれ以前の生産（特に、歴史の始源における共同体生産）における労働主体との明確な区別が第一に志向され、第二に主体と生産条件との関連で、共同体社会と奴隷制や農奴制が区別されると両氏は指摘する¹⁸⁾。まさにその通りである。論理展開の基軸は、「個人を一労働者として裸一貫にすること、それ自体歴史の所産である。」¹⁹⁾の一文にある。マルクスはこの視角から人類史を逆方向に展望する。その結果、近代はまさしくその先行する生産諸形態とは根底的に異なるものとして把握されるに至る。生産力の点でも、生産関係の点でも。生産関係の点でいえば、近代の労働者が「無所有」と把握され、奴隷や農奴が「生活手段の所有者」とつかまれるところにその特徴があると思われる²⁰⁾。（ここではこれ以上たちいらない。）

近代は、生産力の点でも、先行諸形態と根底的に区別される。その一つの指

16) 福富正実、前掲論文、60-66ページ。

17) 同上、73-75ページ。

18) たとえば、芝原拓自、前掲書、42ページ。

19) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, 1857-1858, Dietz Verlag, 1953, S. 375, 高木幸二郎訳「経済学批判要綱」Ⅲ, 1961, 408ページ。

20) *Ibid.*, S. 399, 邦訳同上, 434ページ、この点の指摘として、中村哲、前掲書、284-286ページ参照。

標が、上述した労働主体の自立化、つまり共同体からの個人の自立である。（これは、「資本論」では、ひとまず、イギリスの14世紀・15世紀の独立自営農民としておさえられるが、「諸形態」では、後にほんの少しふれられているにすぎず、構成は著しく異なる。）第二は、客体的富の存在形態（特に労働手段として機能するもの）の変化がつかまれる。一方では、土地＝自然、他方では、労働そのものによってつくられた労働手段。よって、産業構造における農業から工業＝産業への比重変化²¹⁾。第三は、生産の目的の差異として現われる。一方では、共同体およびその成員維持のための使用価値の生産。他方では、交換価値＝価値の生産、富の生産が目的²²⁾。第四は、上と関連するが、自然と人間との質料変換の過程が、直接的でなく、商品や貨幣という中間項を媒介として遂行されることにも現われる。以下この四点について順次各論しよう。

マルクスは、共同体（原始共同社会ないしそこから一歩でた共同体社会）とそれにもとづく所有について次のようにいう。

「共同（種族）団体の特殊な一形態と、それと連関する自然にたいする所有の——ないしは、自然的定在であり、共同体によって媒介された個々人の客観的定在である生産の客観的条件にたいする関係行為の——特殊な一形態とのあいだの本源の統一——一方では特殊な所有形態として現われるこの統一——は、一定の生産様式自体のうちにその生きた現実性をもっている。この生産の様式とは、個人相互の関係行為として現われるとともに、非有機的自然にたいする個人の特定の活動的關係、特定の労働様式（それはつねに家族労働であり、しばしば共同体労働でもある。）としても現れるのである。最初の大きな生産力として現れるのは、共同体自身である。特殊な種類の生産諸条件（たとえば、牧畜、農耕）にたいしては、特殊な生産様式と特殊な生産諸力が発展するが、この生産諸力は、諸個人の特質として現れるような主体的なものでもあり、また客体的なものでもある。

21) *Ibid.*, S. 384, 邦訳, 418ページ, さらに S. 393, 邦訳, 428ページ。

22) *Ibid.*, SS. 387-388, 邦訳, 420-422ページ。

労働する主体の生産力のある一定の発展段階（中略）に、究極において、彼らの共同体とそれを基礎とする所有は帰着する。」²³⁾（傍点、筆者）
もう一つ引用しよう。

「共同体が、その生産諸条件との一定の客観的統一における諸主体を想定し、あるいは一定の主体的定在が共同体自体を生産条件として想定しているすべての形態は必然的に、制限された、原則的に制限された生産力の発展にだけ照応する。生産力の発展はこれらの形態を解体するし、その解体自体が人間の生産力の一発展なのである。」²⁴⁾（傍点筆者）

以上でいわれていることは、個人の労働の生産力の低位性以外のなにものでもない。こうした低位性の補完として、共同体が存在する。この共同体が「すべてを吸収し、すべてを包括していた」²⁵⁾のである。

従来、所有の本源の形態を説明する場合、この関係が十分に展開されていたとはいいがたい。「本源的所有」の三規定のマルクスによる位置づけ（平田氏では、①生産、②類帰属、③意識関係行為の順）は、上の共同体と個人の関係をマルクスがいかにみていたかをさらに明確にしてくれる。

「所有とは、本源的には自分に属するものとしての、自分のものとしての、人間固有の定在とともに前提されたものとしての自然的生産条件にたいする人間の関係行為のことにほかならない。すなわち自己の肉体のいわば延長をなすにすぎない、自分自身の自然的前提としてのこれら生産諸条件にたいする関係行為である。彼は、本来は、自己の生産諸条件と関係しているわけではなくて、主観的には彼自身として、同じく客観的には彼の生存のこの自然的無機物的諸条件のなかに二重に存在しているのである。これら自然的生産諸条件の形態は二重である。すなわち1) 共同体の成員としてのその定在、したがってこの共同体の定在。この共同体は本源の形態においては、種

23) *Ibid.*, SS. 394-395, 邦訳, 429ページ。

24) *Ibid.*, S. 396, 邦訳, 431ページ。

25) *Ibid.*, S. 375, 邦訳, 408ページ。

族団体，多かれ少なかれ変形された種族団体である。2) 共同体を媒介とする，彼自身のものとしての土地にたいする関係行為。共同体的な土地所有であり，同時に個々人の個別占有。」²⁶⁾ (傍点筆者)

ここでは，平田氏の①生産②類帰属の順序は逆転した位置づけを与えられている。そのことは，かの三形態（アジア的，ローマ的，ゲルマン的）での共同体の持つ経済的意味合いを明確にする。この点に最大の注意が払われなければならない。まず一括して「共同体所有」として把握され，その後にはじめて諸形態間の相違（共同体の強度，土地所有の形態など）が語られるのである。しかし，その場合も，自然的；地理的，気候的等の外的・客観的条件と主体的条件が共に考慮された上でなされなくてはならぬので，アプリオリに生産力の高低を，かの三形態が表現するとみるわけにはいかない²⁷⁾。

第二の富の存在形態（労働手段として）の変化に移ろう。この点からは，労働手段が，生産力の発展とともに，それ自体が労働にもとづくものになっていくことが語られる。マルクスが「共同体的土地所有」を「歴史的状態Ⅰ号」と呼び，「用具にたいする所有」を「歴史的状態Ⅱ号」としているのはこの観点からである²⁸⁾。勿論，いまだギルドという共同体Ⅱを身につけてであるが。中世の発展性をここにみることも出来よう。これにたいして近代では，「機械制大工業の所有」ということになる。

第三に，「富の生産」が近代においてそれ自身生産の目的となること，しかも「富の生産」のブルジョア的表皮の下にひそむものは「自然にたいする支配の完成」，つまり人間の能力の開花であることが見抜かれる。この点をマルク

26) *Ibid.*, S. 391, 邦訳, 425-426ページ。個人には，土地への関係行為に先立ち，まず共同体への帰属が存在しなければならない。同様の記述は，S. 389, 邦訳, 423ページ，S. 492, 邦訳, 426ページにもみられる。

27) 諸々の共同体の形態にアプリオリに生産力格差をもちこむことへの戒めとして S. 376, 邦訳, 408ページの叙述を参照のこと。この点での論争として，望月清司氏と熊野聡氏の前掲書を見られたし。尚，生産力発展と地理的関連を語るマルクスについては，*Das Kapital*, Bd. 1, S. 536, 邦訳, 407-408ページも参照のこと。

28) *a. a. O.*, SS. 398-399, 前掲訳, 433-434ページ。

スをして語らしめよう。

「偏狭なブルジョアの形態を皮むけば、富とは、普遍的な交換によって作りだされる個人の欲望能力、享楽、生産力等の普遍性でなくてなんだろうか？ 自然諸力——いわゆる自然の諸力でもあり、人間固有の本性(Natur)の諸力でもある——にたいする人間の支配の完全な発展ではないのか？ 先行する歴史的発展は、発展のこの総体性、いいかえると既成の尺度ではまったく測れないような、あらゆる人間の諸力そのものの発展を自己目的とするが、『富』とはこの歴史的発展以外のどんな前提ももたない、人間の創造的素質の絶対的創出ではないのか？ そこでは彼は、ある現実性のうちで再生産されるのではなく、彼の総体性を生産するのではないのか？ なにか既成のものにとどまろうとするのではなく、むしろ生成の絶対的運動のうちにあるのではないのか？」²⁹⁾

ここにみられるように、ブルジョアの所有を「自然への支配の完全なる発展」という限りでマルクスはその深みにおいて所有の真理をつかむ努力も怠ってはいない。

第四に、富の生産は、龐大な富の流出、流通を生み、それらは相互に前提しあう関係にある。「資本論」において最初の分析対象となったのは、この私的交換に供され、流通する龐大な労働生産物としての「商品」である。「資本制的生産様式が支配的に行なわれる諸社会の富は一つの『龐大な商品集成』として現象し、個々の商品は、こうした富の原基形態として現象する。」³⁰⁾ は有名な冒頭の言葉である。「要綱」では、この商品世界を「物的依存関係」³¹⁾ としてこれをおさえているといえる。

以上の展開は、近代において出現する「個人的所有」の重要な意味あい(生産力視点)、古い原始共同社会や、そこから一步ではいるがいまだ共同体

29) *Ibid.*, S. 387, 邦訳, 421ページ。

30) *a. a. O.*, S. 49, 前掲邦訳, 35ページ。

31) *a. a. O.*, SS. 73-82, 邦訳, 77-85ページ。

が基礎であるゲルマン共同体のもとでは、不成立とならざるをえない所以を説いたものである。

IV 生産諸関係としての所有

前節では、近代において前近代的生産とは全く異なる基盤の上で生産が遂行されるということを、「要綱」「諸形態」におけるマルクスの叙述に依拠しながら展開してきた。近代の特徴は、たえざる生産力の発展、そして自然の完全な支配としての圧倒的富の増大である。そこでは、生産諸関係は前提されたままであったが、（とはいえ、一定入りこまざるをえなかったが）ここでは、そうした生産諸力の発展を、一方で支えるものとして、また他方でそれとの矛盾と対立の関係にあるものとしての生産関係が考察の俎上にのぼってくる。

マルクスにおいては、近代ブルジョア社会の生産関係の最も特徴的なものとして2つのものが挙げられる³²⁾。一つは、価値法則の展開あるいはそれと同義として把握せられる、社会的生産の無政府性。もう一つは、同様に価値法則の基礎上で展開する剰余価値の生産と取得の法則である。

(1) 社会的生産の無政府性

近代ブルジョア的生産は、圧倒的富の増大を生み出したのであるが、あまりの富のゆえに人間が逆に支配されるというパラドックスが生じる。何故か。

資本制生産は、直接には、産業資本家の私的生産と私的取得を特徴としている。と同時にそれゆえに、特殊の生産物種に特化した生産、分業の極度の発達、そうした私的資本家どうしの私的交換を必然化する。社会的生産というのは、この私的交換を通じて間接的にのみ貫徹するにすぎない。それが全理由である。マルクスはこの私的交換に供される労働生産物を商品と呼んでいる。ここから、「資本論」冒頭に登場する「近代の富の原基形態」としての商品は、「社会的生産の無政府性」を内包しているものとして最初から存在するという

32) 諸々の細部の関係や、この2つの基本的ないし基礎的生産関係の諸々のヴァリエーションについてはここでは問題にしない。次稿予定。

ことがわかる。

マルクスは、「資本論」に関する手紙のなかで次のようにいう。

「僕の本のなかの最良の点は次の2点だ。(1)これには、事実のいっさいの理解がもたづいている。第一章ですでに強調されているような、使用価値で表わされるか交換価値であらわされるかに従っての労働の二重性、(2)剰余価値を利潤や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立にとり扱っているということ。」³³⁾

第2の点はしばらくおくとして、第1の点は、商品の分析にしたがって、労働の二重性（一方は具体的有用労働、他方は、抽象的人間労働）が剔抉されることをいっているが、まさに、後者の抽象的人間労働こそ、上のところで確認した社会的関係、生産関係を表現するものとして、マルクスがその苦渋にみちた理論的格闘の中から生みだし、「いっさいの理解」の土台として据えたものなのである。

広松渉氏の努力は、この概念こそ、またそこに込められている主体相互間の関係こそ、マルクスが初期の疎外論から脱出して、より高度な物象化論へと到達したことを示すものに他ならない、とする点にあるが、この概念理解については傾聴すべきものである³⁴⁾。商品A＝商品Bという等置（簡単な価値形態）にこそ、資本制の全矛盾が即自的に含まれているとすることこそ疑いもなくマルクスのものであり³⁵⁾、そのことは、「資本論」理解にとって不可決の条件である。マルクスは、そのように「抽象的人間労働」ないし「簡単な価値形態」に豊かな含蓋をもたせて、資本主義の社会的生産の無政府性、不断の「動揺」「痙攣」「不安定」を通じてのみ貫徹する社会的生産へ焦点をあてていく基礎づくりを果たしたのである。

ここには従来の論争で、欠落している視角がある³⁶⁾。平田氏はたしかに商品

33) マルクスからエンゲルス宛て手紙（以下M→Eと略す）1867, 8, 24日付, MEW. Bd. 31, S. 326, 邦訳「マルエン全集」第31巻, 273ページ。

34) 広松渉「マルクス主義の地平」1969, 第4部参照。

35) M→E, 1867, 6, 22日付, MEW. Bd. 31, S. 306, 邦訳, 256-257ページ。

36) 尾崎芳治, 資本主義から社会主義へ, 「経済」1975, 6月, では簡単にふれられているがそれ以上の展開はない。林氏, 長砂氏, 芦田氏などもこの点では節欲されているようである。

論にスポットをあてられた。しかし「商品論」のポジティブ理解という、およそマルクスが志向したものと逆の方向でである³⁷⁾。氏を含む諸論者のもう一方での顕著な傾向は、「資本論」第一巻の当面の目標は、直接的生産過程にあるとして、そこにかの「(再建) 個人的所有」の全ての内容を集中させるという方向である³⁸⁾。しかし、「資本論」のマルクスは、そうした理解を斥ける。というのは、「資本論」ではすべての概念が相互前提しあっているということ、この点は、マルクスの経済学の方法論的構想との関連でなにもましてつかまなくてはならない方法論であるからである³⁹⁾。(下向法, 上向法) 商品論についてはすでに述べた。この相互前提のもう一つの例は、第一巻において、最終目標たる世界市場恐慌・産業循環が立論の重要な地点で、その都度ふれられていることにみられる。労働者へのその影響という観点から。例えば、機械制大工業の革命性にふれて次のようにいう。

「工業制度の拡大で飛躍的な拡大可能性とその世界市場への依存性は、必然的に、熱病的な生産とそれにつづく市場の充溢を生み出し、市場の収縮とともに麻痺状態が起こってくる。産業の生活は、中位の活況、繁栄、過剰生産恐慌、そして停滞という相次ぐもろもろの時期の序列に転化する。機械経営のために労働者の就業としたがってまた生活地位が陥れられる不確実と不安定とは、産業循環のこのような周期的交替とともに正常なものとなる。」⁴⁰⁾ これと関連して、綿工業に関しての1770-1863年までの産業循環が展開される⁴¹⁾。

また蓄積論では、労働者階級の最高給取得部分もこの産業の生活＝産業循環からくる不安定性、とくに恐慌のもたらす決定的破壊から免れえないという事

37) 平田氏流の理解では、マルクスの意図するブルジョア社会の根底からの批判(つまり商品生産否定はブルードン批判、のみならずイギリス経済学批判を意味する。)という決定的部分が失われる。MEW, Bd. 29, S. 573, 邦訳, 449ページ, 同, SS. 317-318, 邦訳, 249ページ参照。

38) 最近の西野, 西村両氏の論文もこの線に沿ったものといえる。

39) 見田石介, 「資本論の方法」昭和38年, には, マルクスの弁証法に関する適切なまとめがみられる。氏によれば, マルクスの先行諸概念は, 「借りのある概念」であり, 最終範疇と関わりをもって, 相互前提しあっている。

40) *a. a. O.*, S. 476, 前掲邦訳, 362ページ。

41) *Ibid.*, SS. 477-478, 邦訳, 364-365ページ。

実が示されている⁴²⁾。

「相対的過剰人口」=「産業予備軍」は、自然の人口法則に依拠しない、自らの人口法則として資本がうちたてたものであることを述べつつ、この産業予備軍にも「産業循環」からくる伸縮性が不可避であるという点も関説される⁴³⁾。

さらに第3に確認しうる点は、第一巻の生産過程でも、最終的目的たる「恐慌」解明の諸契機が即時的に展開されていることである。つまり「相対的剰余価値の生産」と「資本制蓄積の一般法則」で、「生産のための生産」「蓄積のための蓄積」の傾向が語られ、供給側の過剰性が印象づけられると同時に、一方で資本の側への富の蓄積と他方で労働の側への貧困の蓄積という関係を見出し、マルクスの過少消費=過剰生産=部門間不比例の基礎的構図が仕立てあげられているのである⁴⁴⁾。

そのみではない。「蓄積論」では「資本の有機的構成の高度化」という概念が登場するが⁴⁵⁾、まさに、これは第三巻で登場する「利潤率の傾向的低落の法則」⁴⁶⁾への布石なのである。(これについては後述する。)

以上のように、「資本論」第一巻でも、一章ですでに、価値概念、価値形態に資本制の社会的生産の無政府性が込められ、またその後の展開でも、必要な限りで産業循環や恐慌にふれられ社会的生産の不安定性の労働者階級への影響が問題にされている、と同時に、恐慌への論理的布石を積み重ねていくという弁証法的構想を「資本論」は有している。恐慌や経済循環は、労働者の運命に前提され、労働者階級の「無所有」と「貧困化」を論ずる場合、大きな位置が与えられているとすべきである。

(2)他人の剰余労働の取得

前述したマルクスの「資本論」に関する手紙で示唆された「最良の点」の(2)

42) *Ibid.*, SS. 697-701, 邦訳, 526-530ページ。

43) *Ibid.*, SS. 661-662, 邦訳, 499-500ページ, および, SS. 666-670, 邦訳, 503-506ページ。

44) 高木幸二郎「恐慌論体系序説」1956, 第三章参照。

45) *a. a. O.*, SS. 650-657, 前掲邦訳, 491-497ページ。

46) Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, SS. 221-277, 邦訳, 第3巻, ②180-223ページ。

がここでの問題である。その場合、「理解」の根底に(1)価値法則があるという点がまず確認されていなければならない。と同時に、剰余価値があの最終的分配における利潤や利子や地代といった特殊形態から独立にとりあげられているという意味も貴重である。というのは、現実世界ではその取得に際し、諸々の「不安定性」「不確実性」がつきまといざるを得ないからである。マルクスの概念化には、たえず、「わな」が仕掛けられているとされる所以であろう⁴⁷⁾。上向法。弁証法。

それはともかく、マルクスは「他人の剰余労働の取得」そしてそれを媒介としての「資本——賃労働関係」のたえずの再生産、いな拡大再生産を、「資本論」第一巻第三篇以降で展開している。労働者階級の運命は、「貧困化」の泥沼にあえぎ続けるものとして固定される。マルクスはいう。

「第四篇で相対的剰余価値の生産を分析したときに見たように、資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるすべての方法は、個々の労働者を犠牲として行なわれるのであり、生産を發展させるすべての手段は、生産者の支配および搾取手段に転化し、労働者を部分人間に不具化させ、彼を機械の附属物に格下げし、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、自立的力能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的力能を彼から疎外するのであり、それらの方法と手段は彼の労働条件をねじゆがめ、労働過程ではきわめて偏狭唾棄すべき専制支配に彼を服従させ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れる。ところが、剰余価値生産のすべての方法は、同時に蓄積の方法であり、蓄積のあらゆる拡大は、逆に右の方法の發展の手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は彼の給与がどうであろうと——高かろうと低かろうと——悪化せざるをえない、ということになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の範囲および精力と均衡させる法則は、ヘファイトスの楔がプロメテウスを岩に釘づけしたより

47) M→E, 1867, 6, 27日付, MEW. Bd. 31, SS. 312-313, 邦訳, 262-263ページ。

もいっそう固く、労働者を資本に釘づけする。それは、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。だから、一方の極での蓄積は、その対極では、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する階級のがわでは、同時に、貧困・労働苦・奴隷状態・無智・野性および道徳的墮落の蓄積である。」⁴⁸⁾

このように、Ⅲで展開された生産諸力の発展＝自然の完全な支配への傾向は、労働者にとっては、それ自体としては存在せず、いなまさに正反対物に転化し、自らを「完全に空にすることとして現れ」⁴⁹⁾るのである。貧困化。無所有。

労働者の労働力商品の価値は、時々刻々の価格の変動を通じてであるが、おおむね一定の範囲に抑えられる。それを可能とするのが、まさしく、機械制大工業の革命力にもとづく「相対的過剰人口」＝「産業予備軍」の創出なのである。ここに、労働力商品の価値決定の秘密、また、恐慌を最終目標としたマルクスの理論展開の全秘密が存在するといってもいいすぎではない⁵⁰⁾。つまり、資本制の産業循環と相対的過剰人口によって、現役労働軍は、肉体的維持にせざるを得ない程度に必要の労賃と高まる蓄積に応じての強制的労働強化とあがくの果ての早死、さらに、失業の恐怖に苛まれるという運命に翻弄される。予備軍にとっては、餓死かさもなくば乞食。これが労働者の「無所有」とマルクスにより規定される現実なのである⁵¹⁾

マルクスにあっては、「不払剰余労働の取得」という限りで、資本制を奴隷制や農奴制と同一視する観点と⁵²⁾、前者と後者は全くちがった独特の階級社会だという認識が存在したと思われる。生産諸力における最高度の発展、自然のコントロールの完成への発展という側面から逆照射された現実における生産＝

48) a. a. O., SS. 674-675, 前掲邦訳, 509-510ページ。

49) Marx, *Grundrisse*, S. 387, 前掲邦訳, Ⅲ, 421ページ。

50) マルクスの「資本論」の時代的意味は、産業革命と経済恐慌(循環)が労働者に及ぼす相乗的・累積的・重層的効果の総合理解であったといえよう。

51) マルクスは「経哲手稿」(1843-44)で、すでにこうした点の確認を終えている。藤野沙訳; 1963, 32-37ページ参照。エンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状態」(1845)は、その認識の深化と強化に大いに力があつた。

52) 林氏は、「所有理論」でこの点を極力強調される。

所有関係面での強烈な不均衡、そしてこのことに規定されての階級的矛盾の激化と単純化は、他の階級社会とは決定的に区別される所以である。まさに、ここにこそ、マルクスが次社会として無階級社会を展望しえた最大の根拠の一つも存在するのである。節を改めよう。

V 「否定の否定」の必然性

以上の展開で、最も基本的な諸規定に関する限りで「ブルジョア的所有」が明確にされた。ここからかの「否定の否定」の結果、「再建される」「個人的所有」は、ひとまず、IVで展開された生産関係の2内容が根底から払拭され、IIIの生産諸力がそのまま労働者の富と化するということによって規定されうる。更に、第一の定立たる「個人的所有」は、一定の生産力的基礎と階級的所有の事実上の消滅という2点からおさえられた「人民的富」*Volksreichtum*,⁵³⁾の可能となった14世紀・15世紀のイギリス社会を指し示している。第一、第三の定立では共に、II節の積極的な人間の本質が個人によって獲得されている。(詳述は別稿予定。)

さて、「資本制」の「否定」がマルクスによって「必然」とつかまれた所以はどこにあったか。第一に、先述した客観的矛盾の激化。それに規定されての労資の対立の激化。第二に、プロレタリアートの頭脳=哲学の完成としての「資本論」。第三に、「社会的自然」とでもよびうる「社会的生産の無政府性」の廃止の客観的条件。第四に、その主体的条件。以上である。この点を以下簡単にみよう。

前述のように「資本制蓄積の一般法則」のところでは、労働者階級の「貧困化」が明確にされ、「否定の否定」の箇所では、それを媒介にしての「反抗」が必然的に「増大」という叙述がみられる。この「反抗」「反逆」は、資本制を根底からゆさぶる「恐慌」に際してはまさに増幅したものとして現出す

53) a. a. O., SS. 744-745, 前掲邦訳, 563ページ。

る⁵⁴⁾。

さらに、「ブルジョアの経済のあらゆる諸矛盾の現実的な総括と暴力的調整」⁵⁵⁾としての恐慌自体が、ブルジョア社会が発展するとともに、激化、長期化する。マルクスは次のように指摘している。

「生産諸力は、この所有諸関係にとって強大になりすぎて、いまではこの所有諸関係が生産諸力の障害となっている。そして、生産諸力がこの障害を突破するとき、それはブルジョア社会全体を混乱におとし入れて、ブルジョアの所有の存立をあやうくする。ブルジョアジーは、どういう手段でこの恐慌を切り抜けるのだろうか？ 一方では、やむなく大量の生産諸力を破壊するという手段で、他方では新しい市場を獲得し、またまえからの市場をいっそう徹底的に開発するという手段でそれをきりぬけるのである。つまり、どのようにして？ つまり、いっそう全面的でいっそう激烈な恐慌を準備することによって、また恐慌予防の手段を減らすことによって、それを切り抜けるのである。」⁵⁶⁾

このような見透しのもとで、第一巻の「資本の有機構成の高度化」が展開され、第三巻では「利潤率の傾向的低落の法則」が予定される。これが必然性の第1である。

第二に移ろう。「資本論」が、労働者階級の頭脳として、その哲学として、「資本制生産様式」の本質把握を志向したものであることは論を俟たない。ここでは、すべての本質的連関とその現象形態が明確にされるなかで労働者の頭脳中におけるあらゆる転倒した映像の形成が払拭されるとマルクスが考えていたこと、この点を指摘するに止めよう。物神性の克服。

第三。これは、「共同計画にもとづく全国の生産調整」を労働者が獲得する

54) 小資本家層の没落、現役労働者の大量失業。無所有の極。

55) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, (1861-63) MEW, Bd. 26, II, S. 510, 邦訳、「マルエン全集」第26巻、II、689ページ。

56) Marx, Engels, *Das Kommunistische Manifest*, 1848, MEW, Bd. 4, SS. 466-468, 邦訳、「マルエン全集」第4巻、480-481ページ。

ことを意味する。詳論は、第二巻での資本制の社会的再生産の本質把握の展開にもとめられるとしても（再生産表式の形で）、この点は、すでに、欲望と労働ならびに労働生産物の三者連関把握として、商品論の中に位置している。

「共同の生産手段をもって労働し、その多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由人の団体を考えてみよう」として、

「労働時間は、二重の役割を演ずることになる。その社会的に計画的な配分は、さまざまな欲望にたいするさまざまな労働機能の正しい比率を規制する。他方では、労働時間は、同時に共同労働についての生産者の個人的負担の、したがってまた総生産物のうち個人的に消費されうる部分についての生産者の個人的分前の尺度として役立つ。人々の彼らの労働および労働生産物にたいする社会的連関はこのばあいでは、生産においても分配においても依然としてすぎとおるように簡単である」⁵⁷⁾と。また、このような連関把握が簡単化する客観的条件として、マルクスは「資本の集中」という事実を指摘している。というのは、ますます資本家が少数化していくにしたがって、企業内での組織性＝統一的連関掌握が全社会的規模へと広がっていくからである。株式会社や国有企業（鉄道など）に次社会の芽をみるのも一つはそのためである⁵⁸⁾。

第四に、主体はいかに準備されるとマルクスはみていたか⁵⁹⁾。その第1は、上述の株式会社や国有企業などの形成とも関連するが、資本家の指揮命令機能の後退化現象が⁶⁰⁾、第2に、大工業の社会的分業への影響にもとづく、労働者の能力の全面発達化傾向が指摘される。マルクスは後者についていう。

「近代的工業はけっして、ある生産過程の現存形態を最終決定的なものと

57) *a. a. O.*, SS. 92-93, 前掲邦訳, 71-72ページ。

58) *Ibid.*, SS. 654-656, 同邦訳, 495-496ページ。

59) この点を追求したものとして、富沢賢治、前掲書、尾崎芳治前掲論文などがあげられる。尾崎氏、所有変革と「階級としての労働者」、『経済』1976, 5月も参照。

60) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3. SS. 452-457, 邦訳, 第3巻, ③357-362ページ。また F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, (1877-78) MEW. Bd. 20, S. 259, 邦訳, エンゲルス「反デューリング論」、『マルエン全集』第20巻, 287ページも参照されたし。

はみなさず、またかかるものとしては取り扱わない。だから近代的工業の技術的基盤は革命的である、——すべての従来の生産様式の技術的基盤は本質的に保守的であった。近代的工業は、機械・化学的処置・その他の方法によって、生産の技術的基礎とともに、労働者の機能および労働過程の社会的結合をたえず変革する。かくしてそれはまた、社会的分業をたえず変革し、一生産部門から他の生産部門へ、多量の資本および労働者をたえまなく移動させる。したがって、大工業の本性は労働の転変・機能の流動・労働者の全面的可動性を条件づける。——中略——大工業は、資本の転変する搾取欲のために予備として保有される自由に利用されうる窮乏した労働者人口という奇怪事に置きかえるに、転変する労働需要のための人間の絶対的利用可能性をもってすることを——中略——全体的に発達した個人をもってすることを死活問題たらしめる。』⁶¹⁾

それゆえエンゲルスが次のようにデューリングに反論したとき、必ずしも当たっていないとはいえない。

「だから、マルクスがこの過程を否定の否定と呼んでいるのは、この過程が歴史的に必然なものであることをそれによって証明するためではない。その反対である。すなわち、彼は、この過程が実際に一部はすでにおこっているし一部はこれからおこらざるをえないということを歴史的に証明したあとで、それにつけくわえてこの過程を一定の弁証法的法則にしたがっておこなわれる過程とよんでいるのである。』⁶²⁾

(1980, 1. 26. 脱稿)

61) *a. a. O.*, SS. 510-512, 前掲邦訳, 389ページ。

62) *a. a. O.*, S. 125, 前掲邦訳, 140ページ。(訳語一部改定)